沖縄の未来を担う
人づくり・モノづくりを紹介します。

産卵の時期を迎え、卵を採取するための特別な水槽に移されたヤイトハタの親。

沖縄の栽培漁業を独自技術で支え、沿岸漁業の生産向上と効率化を図る

［沖縄県栽培漁業センター］

青く美しい豊穣の海を目指して

豊かな海の幸に恵まれ、独自の食文化が発達した日本。その一方で近年、暮らしを支えてきた水産資源の減少が叫ばれ、その積極的な回復手段として栽培漁業が始まりました。これは親から卵を採って孵化させ、ある程度成長させた魚介類を放流や養殖用に供給し水産資源の保護、管理に役立てようというものです。

沖縄では、本島北部の本部町大浜に位置する県の栽培漁業センターにおいて1983年の施設開所以来、本県の重要魚介類を飼育し、種苗と呼ばれる稚魚や稚貝などの量産、供給を行っています。現在、センターではタマン（ハマフエフキ）やヤイトハタ（アーラミーバイ）、スギ、マダイなどの4種の魚とヒメジャコやシラヒゲウニなど、それぞれの親や子どもを施設内の水槽や海面生簀で飼育。時期を迎えると稚魚や稚貝などは要望のあった漁業関係者のもとへ届けられます。

亜熱帯に属する沖縄の海は本土とは大きく異なり、海洋生物の多くが熱帯海域との共通種であることが大きな特徴。そのため、他県との連携や協力が難しく独自の種苗生産技術が

求められることから、センターでは一つひとつのデータを積み重ねながら地道な研究開発が進められています。

獲る漁業から作り育てる漁業へ。栽培漁業の発展は豊かな海づくりの大きな支えとなっています。

栽培漁業対象種

ハマフエフキ
方言名：タマン

ヤイトハタ
方言名：アーラミーバイ

スギ

マダイ

シラヒゲウニ
方言名：ガシシ、ガシシャー

ヒメジャコ
方言名：アジケー、ギーラ

豊かな海を育む

上：卵から孵化した稚魚などを飼育している魚類種苗生産水槽。現在、孵化して40日ほどだという約2cmヤイトハタの稚魚たちが泳いでいました。
中：センター後方の海に広がる20基ほどある海面生簀。ここでは親と親の候補となる魚たちが飼育されています。
右：成長が早いことから養殖に向いているというスギ。

お話を伺った、沖縄県栽培漁業センター所長　諸見里 聡さん。

沖縄県栽培漁業センター
〒905-0212　沖縄県国頭郡本部町大浜853-1
TEL：0980-47-5411

水槽の中で鮮やかな外套膜を見せるヒメジャコ。